



High-power, compact, lightweight moving head, JACK at DTS booth in LDI 2012, Las Vegas, NV

10月29日、満月の夜にアメリカ東海岸に上陸したハリケーン“サンディ”は、ニューヨークとその近隣のロングアイランドとニュージャージーに大きな被害を与えました。ライフライン断絶の中でも浸水と停電はニューヨークの都市としての機能をマヒさせ、美術照明制作施工会社が受けた損害は深刻です。工作室や倉庫にたった1インチから2インチの床上浸水があっただけでも、床に触れていた全ての資材は廃棄となりました。通常営業開始は通電開始に委ねられますが、請け負う公演・イベントの日程は変更なしという現状に、納品の締め切りが間近に迫る施工会社は他州からジェネレーターをレンタルして作業を開始しています。このような災害に接すると、都市がいかに電気に依存しているか明白です。

電気を失ったら照明家は職を失うのか。事実、“サンディ”の被害によりThe Broadway League(全国ブロードウェイ劇場産業協会)は29日と30日、全てのブロードウェイ劇場公演を中止しました。しかし、電気だけが照明デザインの源ではありません。多くのニューヨーカーが電気を失った29日の夜、グリニッジ・ヴィレッジのレストランでは蝋燭の灯りを囲み客と従業員が“サンディ”の通過

炎によるあかりからLEDへ

を待ちました。このように電気を失った場合でも照明家が使用可能な道具は様々です。ルネサンスの劇場では蝋燭、オイルランプ、たいまつ順に効率的と考えられ、したがって最も効率が悪く大きな炎と煙を発生するたいまつを室内の劇場で使用する目的は蝋燭よりも安価でドラマティック(光よりも影を演じる)だったからだとしてJean RosenthalとLael Wertenbakerは著書『THE MAGIC OF LIGHT』の中で語っています。

とはいえ、10月にラスベガスで開催されたLDI 2012に蝋燭やたいまつは見当たらず、白熱電球や蛍光灯からLEDへと移行している照明器具の現状が顕著でした。先史時代より人工的に生み出す光の多くはものを燃やすことにより得られる熱放射でしたが、LEDは大きな熱消失なくエネルギーを直接光に変換します。これは19世紀末のガス灯から白熱電球への変化以上の大きな動きであり、照明家にとってはその新しい光をもって物語が生きる空間を描く技術が必要となります。環境負荷の低減効果が期待されているLED照明器具が今後さらに質を高め、社会の未来が平和に電気と共に生きていることを願います。